

## JCAS 次世代ワークショップ（ボーダースタディーズ枠）「領土の再編と地域研究：南スーダン独立後「スーダン地域」再考の試み」（12/18）開催報告

12月18日（金曜日）、東京外国語アジア・アフリカ言語文化研究所にて、JCAS 次世代ワークショップ「領土の再編と地域研究：南スーダン独立後「スーダン地域」再考の試み」が開催されました。今回のワークショップでは様々な分野を専門とする若手のスーダン地域研究者が、領土・境界・集団という問題系を共通のテーマとした最新の研究成果を報告しました。2013年末の南スーダンの内戦勃発後、新たな地域で研究を始めた研究者も多いなか、今回のワークショップは各地域・各学問領域が抱える諸問題をスーダン地域全体の問題として捉え直す大変貴重な機会となりました。

ワークショップは〈報告1〉～〈報告3〉の3つのセッションで構成され、その後コメンテーターによるコメントおよびすべての参加者による総合討議が行われました。はじめに東京外国語大学関係者による企画説明および北大の岩下明裕先生からのメッセージの代読、企画責任者による趣旨説明が行われました。

〈報告1〉では、2011年以後のスーダン共和国、南スーダン共和国の国際関係・国内情勢の変遷と連続性について、それぞれモハメド・オマル・アブディン氏（東京外国語大学、国際関係学・政治学）、村橋勲氏（大阪大学、難民研究・人類学）が報告しました。ここでは南スーダン独立以前・以後のスーダンの政党間の対立関係や中東地域との関係、2013年の南スーダン内戦以降複雑化する紛争主体の動態が明らかになりました。

〈報告2〉では、スーダン共和国国内の政治危機と地域不安定化、首都ハルツームに暮らす南スーダン出身者の動態について、それぞれモハメド・オマル・アブディン氏、飛内悠子氏（大阪大学、難民・強制移動研究）が報告しました。アブディン氏はスーダン地域の政治的・経済的危機が現バシール体制の崩壊ではなく、むしろ体制の安定に貢献している可能性を指摘しました。飛内氏は長期の避難生活とスーダンの首都ハルツームという都市空間のイメージの変遷、それに伴う人々のアイデンティティ形成過程の一端を示しました。

〈報告3〉では、2013年末に生じた南スーダンの内戦によって発生した難民の経済活動と社会組織についてそれぞれ村橋勲氏と橋本栄莉（九州大学、人類学）が、そして南スーダンのアラビア語クレオール言語史については仲尾周一郎氏（京都大学、言語学）が報告しました。村橋氏は2013年以降にウガンダに逃れた南スーダン難民と地域住民が経済的に相互依存的な関係にあるが、難民同士の新たな社会関係や対立が生まれていることを示しました。橋本は南スーダンとウガンダの難民定住地で発達した社会組織の構造と機能を明らかにし、それらの組織が難民間で生じる諸問題の解決機構となる可能性を指摘しました。仲尾氏は南スーダンを代表するアラビア語変種であるジュバ・アラビア語の歴史から、1世紀以上の間、ジュバ・アラビア語の文法構造や社会的機能に本質的な変化が見られないこと、それが南スーダン独自の歴史観の形成にとって重要な役割を担うことが指摘されました。

各報告の後、コメンテーターの栗本英世大阪大学教授より、各発表と本企画に関するコメ

ントを頂きました。コメントでは、2011年以降の現象を理解する上でのCPA(包括和平合意)期(2005-2011)の重要性、「2つのスーダン」の文化と歴史の問題を内包するクレオール・アラビア語を取り上げた仲尾氏の発表が、本企画の趣旨にとって有する意義が指摘されました。

その後、聴衆を交えて議論が行われました。議論の中では、南スーダン独立前後という短期的な視野で問題を捉えるのではなく、スーダン地域の長い歴史の中で現在の問題を捉え直すことの必要性、和平構築に関する研究者、援助関係者、政府関係者それぞれの持つ役割、ボーダースタディーズに対してスーダン地域研究が貢献しうる点などが検討されました。

今回のワークショップでは、研究者よりも政府関係者やスーダン地域の開発援助に携わる国際関係機関の方々が参加者に多いことに大変驚き、その関心の高さを認識することができました。次回以降は、こうした他分野の専門家からの発表も交え、開かれた意見交換の場となるようなワークショップの開催に取り組みたいと思います。

最後に、共催・後援機関となつていただいた北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、そして科研費基盤研究(A)「ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築」(代表：岩下明裕)に携わる関係者の方々に心より感謝申し上げます。

(文責：橋本 栄莉)